

ヨハネスブルグ日本人学校で子供たちが得たもの

JSJ 元保護者 鳥居 亜子

主人の転勤に伴い、娘は1歳から、息子は生まれた時から海外で育ちました。

小学校も約2年おきに転校を繰り返してきましたが、ヨハネスブルグ日本人学校で過ごした1年6か月が、子供たちにとって一番思い出に残る学校生活となりました。

2020年はコロナ禍で、大半の期間をオンライン授業で過ごしましたが、先生方の授業の工夫と、少人数授業ならではの双方向授業で、進度の遅れを感じることなく学習できたことには大変感謝しております。

ヨハネスブルグ日本人学校に通わせて何より良かったことは、子供たちの自己肯定感が上がったということです。少人数なので、毎回の授業で必ず発言する機会があります。先生の講義を一方向的に聞くのではなく、なぜそういう答えになるのか？ほかの人の意見はどうなのか？という探究的学習、自発的学習が自然とできるようになりました。先生方は子供たちの意見を否定することなく、また、全員の意見を聞いて授業を進めてくださいます。

生徒たちは、「～さんと同じです」と安易に済ますことができないので、例え同じ意見でも、一生懸命自分の言葉を使って発表している姿が見受けられました。さらにそれを受けて、他の生徒たちは違う意見を容認するおおらかさを持っているように感じました。

また、始業式では学期の目標を、終業式では振り返りを、日本語と英語で発表する機会があります。行事では各役割を与えられて、リーダーシップを求められることもあります。わが子の場合は、趣味程度の腕前にもかかわらず、校歌や国家のピアノ伴奏をする機会を与えていただきました。

人前で発表したり、何かを披露することは勇気がいることですが、その機会がたくさん与えられたことによって、活躍の場が生まれ、私もがんばったらやれるんだ、という自信につながっていったと思います。特に娘は失敗を怖がる性格で、あまりチャレンジ精神はない方だったのですが、様々な活動を通して、また先輩や友達の頑張る姿をみて、刺激をもらい、何事にもチャレンジしてみようという気持ちが湧いてきたようでした。得意、苦手、にかかわらず、こういうことは経験が大事なんだなあと思いました。

帰国後、日本の学校で交響楽団の方が学校へ来て楽器を演奏するというイベントがありました。偶然、日本人学校の音楽の授業で歌った南アフリカのSiyahamba という曲が演奏され、懐かしくてうれしくなった娘は、「最後に感想を言ってくれる人」と聞かれて、手を挙げて発表しました。後で、友達に「みんなの前で発表してすごいね、恥ずかしくなかった？」と聞かれたそうです。転入したばかりの学校でみんなの前で発表できたと聞いたときはうれしかったです。

自分の意見を言える、そして受け入れてくれる、日本人学校という場で学んだ経験を生かして、これからも成長して行ってほしいと願っています。